
過去からの報復

柊 煌ら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去からの報復

【Nコード】

N4104H

【作者名】

柊 煌ら

【あらすじ】

ある日、女子大生が殺された。刑事課唯一の女性刑事、夏目詩乃と新米刑事の椎葉雄介が事件を紐解いていく…。が！！また新たな被害者が現れる。被害者の共通点は？そして、被害者達から見えてきた暗い過去とは？そして、犯人は一体誰？

第一章：第1犠牲者（前書き）

この作品は、私の処女作となります。
大変読みにくかったり、間違いもあるかと思いますが、よろしくお
願いします。

第一章：第1犠牲者

(1)

刑事二人は、この暑さに正直うんざりしていた。いや、暑さでは無く事件にうんざりしているのかも知れない。

「椎葉君、何か分かりましたか？」

そう言ったのは、刑事課唯一の女性刑事、夏目詩乃^{なつめしの}。胸まであるストレートの綺麗な黒髪で、スラッとした体型はブラックのパンツスーツがよく似合う。

「はい。被害者は近くに住む柴田綾芽^{しばたあやめ}、19歳。星和女子大の一年です」

椎葉と呼ばれたこの男は、最近刑事課に配属されたばかりの新米刑事、椎葉雄介^{しいはゆうすけ}。きれいな顔立ちに、178cmと高身長のイケメンだ。

「それで、死因は何ですか？」

夏目は、後輩でも誰にでも丁寧な言葉遣いだ。

「被害者は、ヒモの様なもので首を絞められています。詳しい結果はまだ分かりませんが、頸部圧迫による窒息死かと思われます」

椎葉は手帳を見ながら、自分で調べた限りの返事をした。

「目撃者はいましたか？」

「今のところ、まだいない様です」

「第一発見者の方は？」

「第一発見者は毎朝6時頃、この公園を散歩に来られる内田弘^{うちだひろし}さん、52歳。あちらにいらつしやいます」

夏目は、公園の入口あたりに座っている男を見た。

まだ時刻は午前7時。8月のこの時間は、やっぱり暑かった。

(2)

戸田亜由美と、堀川理絵はカラオケに来ていた。
とだあゆみ ほりかわりえ

「亜由美、ニュース見た？」

「見た、見た。あれって綾芽だよね？」

理絵は二回頷いた。亜由美が続ける。

「綾芽、殺されたんでしょ？また綾芽の事だから、何かやってたんじゃないの？」

「多分ね。じゃなきゃ、殺されたりしないっしょ。亜由美はお葬式行くの？」

すると亜由美は、急に嫌な顔に変わった。

「えっ行かないよ。卒業してから、一回も会ってないしね。理絵は行くの？」

「行かない。今更行ったてねえ？」

「綾芽は自業自得だよ」

ー トントン、ガチャー

「失礼します。こちらコーラとメロンソーダです」

店員は、ドリンクを二人の目の前に置くと、速やかに退室して行った。

二人は飲み物片手に、真剣に選曲を始めた。理絵が選曲用のコントローラーをいじりながら、口を開いた。

「恭子にも久しぶりに会いたかったな」
きょうこ

「バイト抜けられないみたい。そう言えば、唯行方不明みたいだよ」
ゆい

「えっ？」

亜由美の言葉に、理絵は身を乗り出した。

「まちで？何で？」

「さあ？誰も居なくなつた理由、知らないみたいだし。理絵は最後いつ連絡とつた？」

「んゝいつだろ？2、3ヶ月くらい前かな？唯、また変な男に捕まってなきゃいいけど」

「唯、男運無かったもんねえ」

そう言つて、亜由美は最新曲を入れた。

(3)

「では、いつも会社に行く前、この公園を散歩されてるんですね？」

夏目にそう質問された、第一発見者の内田は

「そうです」とだけ答えた。

「その時、不審な人物とか見ませんでしたか？」

内田は少し考え、首を振った。

「それでは、何か思い出した事とかあれば、何でもいいので、ご連絡下さい。ご協力、ありがとうございます」

内田はお辞儀をすると、疲れきった様子で帰っていった。無理も無いだろう。殺人現場に出くわしたのだから……。

「死亡推定時間は分かりますか？」

夏目は椎葉に聞いた。

「えゝ、だいたい夜10時から夜中の1時頃だそうです」

「ありがとうございます」

夏目はそうお礼を言うと、公園内を見て回った。

「被害者の所持品は、どうでしたか？」

椎葉は夏目の後ろを、金魚のフンの様についてきていた。

「金品は一切盗まれてはいない様です。ただ、携帯電話が見つかっていません」

「と言つ事は……」

(4)

「あ……あんだ、今更何よ？」

「あら覚えてくれてたのね」

「来ないで……やめて……」

「アイツは私の事、覚えても居なかったわ」

「綾芽を殺したのも……」

「ええ、私よ」

「やめて……謝るから……来ないで」

「ふふっ……もう遅いのよ……サヨウナラ!!」

「イヤッ!!!」

(5)

「椎葉君、目撃者は現れていませんか？」

「犯行から1日以上が過ぎたが、これと言って手がかりらしいものは何もなかった。」

「はい。あの公園は、半年くらい前に痴漢騒ぎがあつてから、夜はほとんど人通りも無かつた様です」

「柴田綾芽は何故公園に行つたんでしょうか？柴田綾芽は近所に住んでますから、痴漢騒ぎの話も知っていたはずでしょう？」

「多分、知っていたと思います。いつもバイト帰りは、バイト仲間と一緒に明るい大通りを帰っていますから」

夏目は手帳を睨んでいる。

「バイトはその日、22時まででしたよね？」

「はい。ですが、バイト仲間には約束があるからって、先に帰つたみたいなんです」

「約束……。誰と約束してたんでしょうね」
「さあ。でも、彼氏は居なかったみたいです」
夏目は手帳を閉じ、珈琲飴を口に入れた。ほんのり甘く、ほんのり苦い飴は、夏目の頭を癒やしてくれる。
「携帯のGPSや発信履歴は調べましたか？」
「はい。ですが、もう壊されてる可能性が高いと思います」
「そうですか。では、聞き込みに行きましょう」
カバンを手にした夏目は、颯爽と署を出て行った。後ろから椎葉が、相変わらず金魚のフンのように、慌ててついてきていた。

(6)

夏目と椎葉は、綾芽の通っていた星和女子大前にいた。
「誰が友達か分かるんですか？」
「分かりませんよ」

そう言つて、夏目は門から出て来た学生に話しかけた。
「すみません、ちよつとお聞きしたいんですが……」

女子学生2人は、夏目の左手にある警察手帳に、少し驚いていた。
「先日亡くなった、柴田綾芽さんご存知ですか？」

「ああ、ニュースになつてる子？確か経済学部って聞いた気が……」

……

「経済学部にお友達いらつしやいますか？」

「あつ、あの子経済学部だよ」

1人の子が、ちよつと出て来た女子学生を指差した。夏目と椎葉はお礼もそこそこに、出て来た女子学生を追いかけた。

「ちよつとすみません。少しお話伺えますか？」

女子学生は、またまた警察手帳を片手にやってきた夏目に驚いていた。

「柴田綾芽さんをご存知ですか？」

「はい」

「お時間、大丈夫ですか？」

女子学生は頷いた。

(7)

夏目と椎葉と女子学生の3人は、近くのファーストフード店にいた。

「お名前聞いてもいいかしら？」

みぞくちりんか

「溝口梨花と言います」

「私は刑事の夏目です。こちらは、後輩の椎葉君です。早速なんです、アナタと柴田綾芽さんはどういうご関係ですか？」

「えっ？関係ですか……」

夏目の横に座っている椎葉は、メモに夢中だ。

「同じクラスの友達ですが、特別仲良しってわけではありません。一番仲良かったのは、美紀ちゃんですね」

「美紀ちゃん？」

「はい。広瀬美紀ちゃんです。今日はさすがにお休みしました」
「そうよね。お友達が亡くなったんだから。それで、柴田さんは親しい恋人とかはいらっしゃらなかったのかしら？」

「たぶん。居なかったと思います」

「では、何か恨まれたりはして無かった？」
すると、急に溝口は俯き、黙り込んだ。

「どう？何か恨まれる様な子だったのかな？」

「……いや。特に思い当たりません。みんなとも、仲良かったです」

「そう。分かりました。ご協力、ありがとうございました」

溝口は、夏目と椎葉に一礼して帰っていった。

「椎葉君、どう思いますか？」

「どう？と言われましても……」

「何か気づいた事、ありませんでしたか？」

「……特にありませんでした」

夏目は、ファーストフード特有の薄いアイスコーヒーを、一気に飲み干した。

「まだまだ修行が足りない様ですね。たぶん彼女は、嘘をついてます」

「えっ？」

「椎葉君、1回署に戻りましょうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4104h/>

過去からの報復

2010年10月9日23時07分発行